J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 2, No. 1 (2017) 223～235

高校生のLINEいじめにおける加害・被害・傍観行動と心理的要因の関連

― 現実との連続性に注目して ―

若本　純子[1]，西野　泰代[2]，原田恵理子[3]

The Relation between Bullying, Victimizationand Bystanding in LINE Communications and Psychological Factors among High School Students : Focused on Consistency with Real-World

Junko WAKAMOTO, Yasuyo NISHINO, Eriko HARADA

要　　旨

本研究では，高校生のLINEいじめと心理的要因との関連を，現実場面との連続性を考慮しながら検討する２つの研究を行った。研究１では，374名の高校生を対象に質問紙調査を行い，いじめの加害・被害経験をLINE，暴力，言葉の３種類で捉え，相互の関連，そして心理的要因との関連を検討した。LINEいじめと他のいじめ，またLINEいじめの加害と被害の関連は一定水準で認められたものの，心理的要因との直接的な関連は見られなかった。一方，いじめ加害の様態は友人関係に関する心理的要因との関連が見られ，LINEを含む加害を行ったことがある高校生は，加害行為の経験がない者に比べて，同調性が高いことが示唆された。

研究２では，645名の高校生を対象に質問紙調査を行い，傍観行動と心理的要因との関連を検討した。傍観行動もいじめ加害・被害と同様に，心理的要因との直接的な関連は見られなかった。LINEコミュニケーションと現実を連続して捉えた時，コミュニケーションの状況にかかわらず傍観行動をとりやすい者ととりにくい者へと大別された。その中で，一貫して傍観行動をとりにくい高校生は他群の高校生とは異なる心理的な特徴が見られ，状況や周囲の影響を受けにくいこと，それと関連して，社会的スキルが高く，他者と違うことへの不安が低いことが示された。

問　題

数あるソーシャルメディアの中でも，LINEはいまや児童生徒の生活の一部として定着した感がある。リスキーブランド（2017）による15～64歳の約4,000名を対象とした調査によると，ソーシャルメディアの中でLINEのアクティブユー

[1] 佐賀大学　教育学部　学校教育講座
[2] 広島修道大学　健康科学部　心理学科
[3] 東京情報大学　総合情報学部　総合情報学科

ザー（日常的に活用している人）の数は突出しており，全年齢の48％（図１），15～29歳においては69％に至るという（15～29歳のアクティブユーザー：Facebook21％，Twitter49％，Instagram 25％）。MMD 研究所（2015）の10代のスマートフォン利用に関する調査結果においても，10代（15～19歳，n=191）の96.9％が LINE を使用していることが示され，同調査は LINE がこの世代のコミュニケーションツールの核となっていると結論づけている。

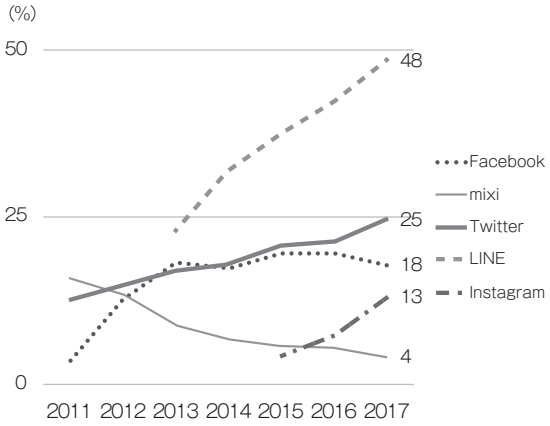

図１　主要 SNS のアクティブユーザーの推移
出所）リスキーブランド（2017）生活意識調査 MINDVOICE 調査生活者分析 SNS 利用者動向

若本（2014a,b，2016）は，一連の研究において，児童生徒の LINE コミュニケーションには，他のソーシャルメディア・コミュニケーションとは異なる特徴があることを指摘してきた。たとえば，高校生を対象とした LINE 使用と友人関係との関連の検討（若本，2014a,b）では，圧倒的多数で LINE は現実場面における友人や親しい人とのコミュニケーションに使用され，相手が親しいほど頻用されることが報告されている。LINE と同じく高校生に人気が高い Twitter が不特定多数の対象を含む相手との比較的緩やかな繋がりのコミュニケーションツールとして利用されている（リスキーブランド，2017）のに対して，LINE コミュニケーションの対象はほとんどの場合，友人や家族等最も身近で親しい人々であり，児童生徒は，現実の友人等との間で行われている対面でのコミュニケーションを物理的に離れた場にまで延長するためのツールとして LINE を用いている。

LINE いじめは，LINE コミュニケーションのトラブルのうち最も深刻なもののひとつであろう。土井（2014）は，LINE 等の浸透により，児童生徒の人間関係は常時接続した状態が維持され，新しいいじめのかたちが生まれつつあると警鐘を鳴らした。その指摘と呼応するように，平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば，高等学校から報告されたいじめのうち，第１位は「冷やかしやからかい，悪口や脅し文句，嫌なことを言われる」が62.3％を占めた一方，「パソコンや携帯電話で誹謗中傷や嫌なことをされる」が第２位で18.2％に上った（文部科学省，2015）。この数値は年々上昇する傾向にある。

ネット上のトラブルが増加すると，学校現場や保護者は，LINE アプリやインターネットの使用を制限すべきだ，あるいはインターネットやソーシャルメディアの特性のせいでトラブルが生まれていると捉えやすい（ボイド（2014）もアメリカにおける同様の現状を述べている）。確かにインターネットを介したコミュニケーションには，発信側と受信側に大きな力の差がある（田中・山口，2016）という，いじめとの関連が憂慮される独自の特徴もある。しかし，LINE いじめに相当する仲間はずれや悪口の書き込み等の悪質なトラブル行為をすることと，LINE の使用頻度そのものは関連がないことも見出されており（若本，2016），ソーシャルメディアの使用が即，いじめにつながるといった単純な話ではない。

さらに，LINE いじめにおいて留意すべきは，現実場面においても児童生徒は親しい人々との間で LINE コミュニケーションを行っているため，LINE いじめは単独よりも，現実場面における暴力や言葉等のいじめとともに生じやすいことである。実証研究においても，ネットいじめ経験者の半数ほどが従来のいじめ，すなわち現実場面にお

けるいじめを経験している（Ybarra & Mitchell, 2004），また，現実場面でいじめ加害と被害の両方を経験した者はネット上のトラブルを引き起こしやすい（西野・若本・原田，2016）といった報告がなされており，LINEいじめは現実場面でのいじめの延長線上にある，あるいはLINEいじめは今やいじめの一形態になったとも言えるだろう。だが，このような観点によるネットいじめの実証研究は，わが国においてまだ少ない。

いじめを4層構造として把握することを提唱した森田は，いじめ場面での観衆と傍観者がいじめを助長する可能性を示唆した（たとえば森田，2010）。また，いじめ被害の多さは，学級内での加害者や観衆の人数よりも傍観者の人数と最も高い相関を示すという調査結果（森田，1990）や，いじめ行動が起きる場面での傍観者に焦点を当てた介入がいじめ行動の抑制に効果的だというメタ分析の結果（Polanin, Espelage, & Pigott, 2012）が報告されている。これらのことから，いじめを抑止するためには，いじめを見て見ぬふりをする傍観者を減らすことが肝要である。それはLINEいじめにおいても同様であろう。

児童生徒のLINEいじめにどのような対応が有効であるか，教師の関心は非常に高い。それは，情報モラル教育が導入されたこととも関連しているだろう。情報モラル教育では，「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」の醸成を目標に，情報社会の倫理，法の理解と遵守，公共的なネットワーク社会の構築，安全への配慮，情報セキュリティの5分野にわたって指導が行われる（国立教育政策研究所，2011）。だが，情報やインターネット場面に特化し，あたかも現実とは別の空間での事象として取り扱うかのような指導が行われるとすれば，LINE等のソーシャルメディア・コミュニケーションとそこで生じるトラブルの本質的な理解から遠ざかることになるであろう。

原田（2014，原田・渡辺，2015）は，高校生に対する情報モラル教育の一環として，道徳の時間に，ソーシャルスキルトレーニング（SST）のプログラムを実施した効果を報告している。その中で，現実場面で役割取得ができる，すなわち相手の立場に立って自らの行動を制御できる高校生はインターネット場面でも同じである一方，役割取得が難しい高校生は現実場面，インターネット場面どちらにおいても難しかったことを見出した。その結果を踏まえ，情報モラルの醸成もソーシャルスキルを基盤としてなされる必要性を示唆している。この知見もまた，現実のリアルな対人関係とLINEコミュニケーションの連続性を考慮することの重要性と，LINEいじめと現実場面のいじめ双方を同時に検証する必要性を支持するものである。

以上の議論を踏まえ，本研究では，児童生徒のLINEいじめの諸相と心理的要因の関連を検討する2つの研究を行う。先行研究においても，いじめと心理的要因との関連は多数検討されてきたが，一致した見解が得られていないのが現状である。いじめとの関連が最も検討されている心理的要因のひとつが自尊感情であり，主として被害者の自尊感情の低さが指摘されているが，それが規定因なのか，いじめ被害の結果なのか，さらにはいじめ加害とどのような関連があるかについては一定した結果が得られていない（伊藤，2017）。そこで，本研究では現実場面との連続性という新たな視点を加えて心理的要因との関連を検討する。

また，LINEコミュニケーションにおいてトラブルに遭った際，高校生は被害感情が相対的に低く，個人情報の扱いやコミュニケーション・トラブルへの対処に関する理解が不適切であったとの知見（若本，2016）を重視し，高校生を対象として研究を進める。

研　究　1

研究1では，高校生のLINEいじめの加害・被害経験と心理的要因との関連を検討する。

従来のいじめ研究では，いじめをひとまとめに扱う傾向がある。本研究ではLINEいじめは，現実場面における暴力や言葉での嫌がらせといった

いじめと連動して起こる可能性があるとの想定をもつため，双方を関連づけた検討を行う。

また，文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において，いじめの諸様態と性別とのクロス集計はなされておらず，様態と性別との関連を検討した実証研究もほとんどない。わずかに，原田・渡辺（2013）が高校生のインターネット上のいじめと現実場面のいじめの併存には性差が見出されなかったとする一方，若本（2016）では高校生のLINEトラブルの加害・被害経験には性差があったとされている。それぞれ検討の対象が異なるとは言え，性差については不明な点が多い。よって，いじめの様態と性別の関連についても検討する。

方　法

2013年7月にA県のP高等学校，Q高等学校（いずれも公立学校）の1，2年生374名（男子141名，女子224名，不明9名）を研究協力者として，質問紙調査を実施した。調査依頼は学校長を通して行い，調査の実施に担任が同意した学級において一斉法で実施された。

調査内容

いじめ　文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」で使用のいじめ項目を援用し，インターネットいじめの部分をLINEトラブルに見合うよう変更・追加した15項目に関して被害経験，加害経験の有無を尋ねた。

心理的距離と同調性　いわゆる「LINE疲れ」の背景と言われるつながり続ける密着した友人関係（たとえばボイド，2014；土井，2014）を，石本ら（2009）は「チャム・グループ的」特徴と捉え，操作的に抽出するために心理的距離と同調性の尺度を用いて検討を行っている。本研究においても，同じく心理的距離10項目4段階評定，同調性9項目4段階評定を使用した。

アンビバレント　友人に密着する心性の根底にある自己-他者の関係性に対する不安定な対象表象を測定するために，詫摩・戸田（1988）が青年の対人態度を愛着スタイルの違いによって測定する目的で作成した尺度項目のうち，アンビバレントに該当する6項目を用いた。4段階評定。

自尊感情　伊藤・若本（2010）が学校教育における活用を目指し，児童生徒に焦点化して開発した「自己評価・受容」「関係の中での自己」「自己主張・決定」の3次元からなる自尊感情尺度を用いた。22項目4段階評定。

その他にフェイス項目として，学年，性別を尋ねた。また，本調査は，第1著者の所属機関における研究倫理審査を経て実施された。

なお，使用変数において学校による有意差がないことが確認されたため，一括して分析を行うこととした。

結　果

使用尺度の因子分析

いじめ項目は，加害・被害別に因子分析を行った。その結果，加害・被害ともにほぼ同じ因子構造が見出され，暴力を伴ういじめ（加害 α =.85，被害 α =.85），言葉・態度によるいじめ・嫌がらせ（加害 α =.69，被害 α =.70），LINEいじめ（加害 α =.71，被害 α =.70）の3因子が抽出されるとともに，一定の内的整合性が確認された。また，心理的要因である心理的距離（α =.85），同調性（α =.74），アンビバレント（α =.81）は先行研究通り1因子性と内的整合性が確認された。さらに，自尊感情も先行研究通りの3因子「自己評価・受容」（α =.81）「関係の中の自己」（α =.82）「自己主張・決定」（α =.82）が抽出され，内的整合性が確認されたため，各下位尺度を用いて尺度得点を作成した。

いじめ加害・被害経験と心理的要因との相関

まず，いじめの種類間の関連を調べるために，加害・被害別に相関分析を行った。その結果，加害経験においても被害経験においても，LINEいじめと暴力，言葉によるいじめとの間に中程度の正の相関が見られた（表1－1）。

他方，各いじめの種類の加害と被害との関連性を相関分析で検討したところ，暴力を伴ういじめにおける加害・被害の相関係数 r =.32，言葉・態

表1－1　加害・被害別のいじめ3種間の相関分析結果

	暴力	言葉	LINE
暴力	－	.41	.40
言葉	.29	－	.32
LINE	.56	.31	－

注）左下：加害，右上：被害
全相関係数は $p<.001$ で有意であった。

表1－2　いじめ3種の加害・被害と心理的要因との相関分析結果

	心理的距離	同調性	アンビバレント	自己受容	関係的評価	自己決定
加害暴力	−.19**	.12*	.04*	.01	−.16**	.02
加害言葉	−.01	.13*	.06	.02	−.09	.00
加害LINE	−.16**	.17**	.09	−.02	−.11*	.03
被害暴力	−.12*	.06	.19**	−.22**	−.20**	−.11*
被害言葉	−.07	.03	.21**	−.11*	−.09	.00
被害LINE	−.12*	.15**	.20**	−.14**	−.14**	−.07

注）**：$p<.01$，*：$p<.05$

度によるいじめ・嫌がらせにおける加害・被害の相関係数 $r=.49$，LINEいじめにおける加害・被害の相関係数 $r=.41$ と，こちらも中程度の正の相関が見られた。

さらに，いじめと心理的要因との関連を同じく相関分析で検討したところ，加害経験では $|.00|<r<|.19|$，被害経験では $|.00|<r<|.22|$ と，どちらも弱い相関しか見られなかった（表1－2）。

いじめ加害様態の分類

LINEいじめの加害経験がどのような要因と関連するかを検討するにあたり，まず，いじめ加害経験時にどのような手段をとったかによって様態を分類した。なお，被害経験は，心理的要因との関連が見られても規定因なのか結果なのかが曖昧であるという先行研究の指摘（たとえば伊藤，2017）を踏まえ，本研究では扱わないこととする。

加害様態の分類結果は，言葉のみ182名（全体の50.3%），暴力のみ1名（0.3%），言葉＋暴力18名（5.0%）であった。本研究が焦点とするLINEいじめの加害経験者は少数であったこと，加えて先行研究（たとえば西野ら，2016；Ybarra & Mitchell，2004）において，LINEいじめは他のいじめと併発しやすいことが指摘されていることから，LINEの他にも言葉や暴力と複数にわたって加害経験がある場合も含めて1群にまとめたところ33名（9.1%）であった。なお，加害経験が全くない者は128名（35.4%）であった。

いじめ加害の様態と心理的要因との関連

高校生のいじめ加害の様態が心理的要因と関連があるか検討するために，いじめ加害の様態を独立変数（該当者が1名のみであった暴力のみ群を除く4水準とした），心理的距離，同調性，アンビバレント，自尊感情3変数（自己評価・受容，関係の中の自己，自己主張・決定）計6変数を従属変数とする1要因分散分析を実施した。

その結果，心理的距離（$F(3,636)=12.13$，$p<.001$），同調性（$F(3,633)=8.31$，$p<.001$），関係の中の自己（$F(3,633)=4.51$，$p<.01$）で有意な結果が得られた。それぞれ多重比較（Tukey

表２　心理的要因を従属変数，いじめ加害様態４群を独立変数とした１要因分散分析結果

	LINE 含	言葉＋暴力	言葉のみ	加害経験なし	*F*	多重比較
	M(SD)					
心理的距離	3.20(.61)	3.25(.60)	3.45(.47)	3.41(.52)	2.92*	言葉>LINE 含
同調性	2.68(.55)	2.43(.53)	2.44(.48)	2.38(.56)	3.07*	LINE 含>加害なし
アンビバレント	2.73(.69)	2.70(.89)	2.61(.67)	2.54(.71)	.89	
自己受容	2.44(.69)	2.28(.74)	2.57(.61)	2.51(.60)	1.47	
関係の中の自己	2.92(.76)	2.84(.61)	3.21(.45)	3.18(.59)	4.94**	言葉>LINE 含，言葉＋暴力
自己決定	2.94(.79)	2.79(.69)	2.99(.52)	2.93(.61)	.72	

注）**：p<.01，*：p<.05

法，p<.05）を実施したところ，心理的距離は言葉のみでの加害群がLINEを含む加害群より有意に距離が近く，同調性はLINEを含む加害群が加害経験なし群より有意に高く，関係の中の自己は言葉のみでの加害群がLINEを含む加害群，言葉＋暴力の加害群より有意に高かった（表２）。

いじめ加害の様態と性別との関連

加害様態と性別との関連を調べるためにx^2検定を行ったところ，有意な結果が得られた（x^2(4)=19.18，p<.01）。残差分析の結果，LINEを含む加害群は男子の度数比率が有意に高く（t=3.9, p<.01），言葉のみ群は女子の度数比率が有意に高かった（t=2.0，p<.05）。

考　察

研究１では，高校生のLINEいじめの加害・被害経験と心理的要因との関連を，暴力や言葉での嫌がらせといった現実場面におけるいじめとの関連と併せて検討してきた。

まず，LINEいじめと他のいじめとの関連，そしてLINE，暴力，言葉によるいじめの間の加害経験と被害経験との関連を調べたところ，いずれも中程度の正の相関が見られた。まず正の相関であった点は，加害経験がある者は被害経験もある，現実場面でのいじめ経験がある者はネット上でのいじめも経験する等の先行研究の指摘と一致していたと言えるだろう。しかし，相関係数値は中程度であり，積極的な解釈は困難である。一方，加害・被害経験と心理的要因とは弱い相関が見られるにとどまった。ここから生じてくるのは，いじめの規定因をシンプルな分析方法で直接的・単一方向的に特定しようとする試みは有効ではないだろうという推測である。いじめは，人，状況等のさまざまな要因がかかわる文脈において生じる。ならば，それらの要因を配置あるいは統制した形でなければ，十全な検討は難しいであろう。今回の曖昧な結果も，この点に起因すると思われる。

続いて，いじめの加害経験を手段によって類型化し，心理的要因との関連を検討した。心理的要因を従属変数，加害様態を独立変数とする１要因分散分析から，心理的距離，同調性，そして自尊感情のうち関係の中の自己の３変数において有意な結果が得られた。心理的距離と同調性は，石本ら（2009）が現代の友人関係に見られるチャム・グループ的特徴を操作的に抽出するために使用した２変数であり，関係の中の自己は，自尊感情の中でも，他者との関係において必要とされ，人のためになっていると感じる肯定的感情を表すものである（伊藤・若本，2010）。これらはすべて友人等との関係のあり方にかかわる心理的要因であり，いじめ加害の様態が，たとえば自己受容等の

自己内に閉じた面ではなく，友人との関係において経験される心理的経験に関連することを示唆している。

多重比較の結果から顕著な特徴が示唆されたのは，現実場面における言葉・態度によるいじめ・嫌がらせのみを報告した群である。この群は，心理的距離がLINEを含む加害群より有意に近く，関係の中の自己の得点がLINEを含む加害群，言葉＋暴力の加害群より有意に高く，加害経験がない者との有意差はなかったものの，他の加害経験がある者との違いが顕著であった。加えて，性差の検討の結果，この群は有意に女子が多かった。

言葉での加害群の，相対的に友人との親近感を感じており，人との関係を通して感じられる自尊感情も高いという状態像は，友人が多くコミュニケーション能力が高く，その結果自尊感情が高い，いわゆるスクールカースト上位の生徒の特徴でもある（堀，2015；鈴木，2012）。そこからの推測になるが，この群の「言葉・態度によるいじめ・嫌がらせ」は，他のいじめとは違う，もっと言うと，いじめではない，別に相手に対して悪いことはしていないと認識されているのではないだろうか。スクールカウンセリングなどの場で，カースト上位の生徒が下位の生徒に対して行った嫌がらせとも思われる言動について，「あれはあの子のために言ってあげたのだ」と話す場面に出くわすことは少なくない。今回得られた結果は，高校生，特に女子高校生におけるいじめの，複雑で一筋縄ではいかない様相を示唆しているものと考えられる。本研究はLINEいじめを主眼としているため，これ以上の議論は避けるが，いじめ加害の意味が文脈によって相対化されている現象については，今後の検討課題としておきたい。

一方，LINEを含む加害群は，加害経験のない群と比較して有意に同調性が高く，また男子生徒が有意に多いことが明らかにされた。記述統計結果（表２）においてもLINEを含む加害群の同調性の平均値は特に高く，この群の特徴として認められるだろう。しかし，いじめ加害経験がない群と比較して同調性が高いという心理的特徴が，LINEを用いたいじめ加害の特性によるのか，LINEを含む様々な手段をとって加害行動をとることによるのか，いじめ加害を行ってしまうことによるのかは，本研究のデータの範囲では判然としない。この因果関係を明らかにするためには，縦断研究を導入し検討する必要がある。

研　究　2

研究２では，高校生がいじめと思しき場面に遭遇した際の傍観行動を取り上げる。研究１と同様，現実の対面状況とLINEコミュニケーション状況の両方を想定し，そこで生じる傍観行動と心理的要因との関連を検討する。

方　法

2016年６～８月に，Ｂ県のＸ高等学校，Ｙ高等学校２校（いずれも公立学校）の１年生645名（男子321名，女子324名）を対象に質問紙調査を実施した。調査依頼は学校長を通して行い，調査は当該学年の全学級の学級担任によって一斉法で実施された。

調査内容

傍観行動（場面想定法による）　大西・黒川・吉田（2009）を参考に，回答者が傍観者の立場にあるいじめと見なしうる事例を作成した。３種類のいじめと見なしうる事例を，状況（２条件：対面とLINEコミュニケーション）×対象（２条件：仲がよい友人，さほど仲よくない友人）の４パターンで示し，そこで自分がとるであろう対応（傍観行動の程度）を想像して回答してもらった。12項目４段階評定。

被異質視不安（高坂，2010）　「友人関係において異質な存在と見なされることに対する不安」が，現代の児童生徒特有の傍観行動の生起と関連する心理的要因のひとつであろうと想定し，導入した。11項目５段階評定。

ソーシャルスキル（嶋田，1998）　傍観行動を抑止し，情報モラル教育等における標的となりうる心理的要因と想定し導入した。他者に対するポジティブな働きかけを示す「向社会的スキル」10

表 3　傍観行動と心理的要因との相関分析結果

	被異質視不安	向社会的スキル	引っ込み思案行動	攻撃行動
LINE・仲のよい友人	.18**	−.22**	.16**	.09*
LINE・さほど仲よくない友人	.19**	−.17**	.10*	.08*
対面・仲のよい友人	.22**	−.24**	.15**	.12**
対面・さほど仲よくない友人	.24**	−.17**	.09*	.11**

注）**：p<.01，*：p<.05

項目，「引っ込み思案行動」8項目，「攻撃行動」7項目の計25項目からなる。4段階評定。

その他にフェイス項目として，性別，学級を尋ねた。また，本調査は，第3著者の所属機関における研究倫理審査を経て実施された。

なお，使用変数において学校による有意差がないことが確認されたため，一括して分析を行うこととした。

結　果

使用尺度の因子分析

いじめと目される場面における傍観行動について因子分析を行った結果，「対面状況において被害者が仲がよい友人の事例（α=.79）」「対面状況において被害者がさほど仲がよくない友人の事例（α=.87）」「LINE コミュニケーション状況で被害者が仲がよい友人の事例（α=.87）」「LINE コミュニケーション状況で被害者がさほど仲がよくない友人の事例（α=.88）」の4因子（各3項目）が抽出され，それぞれ内的整合性が確認された。心理的要因のうち，被異質視不安は主成分分析により1因子性が（α=.89），また，社会的スキルでは，先行研究通りの「向社会的スキル（α=.74）」「引っ込み思案行動（α=.86）」「攻撃行動（α=.84）」3因子が抽出されるとともに内的整合性も確認されたため，全下位尺度を用いて尺度得点を作成した。

傍観行動と心理的要因との相関

場面（対面・LINE コミュニケーション）×対象（仲がよい友人・さほど仲よくない友人）の4種類の傍観行動得点とパーソナリティ変数である被異質視不安，社会的スキルの下位尺度である向社会的スキル，引っ込み思案行動，攻撃行動の計4得点との間の直接関連を検討するために相関分析を実施したところ，|.09|<r<|.24| の弱い相関しか見られなかった（表3）。

LINE コミュニケーション状況と対面状況とを組み合わせた傍観4群と性別との関連

児童生徒による LINE 使用の特徴を踏まえ，現実場面との連続性を想定した検討を行うために，LINE コミュニケーション状況，対面状況それぞれの傍観行動得点の平均値を境に高低に分け，それらを組み合わせて傍観4群を作成した。

高校生の LINE コミュニケーションには性差が見出されている（若本，2016）ため，傍観パターン4群と性別に関連がみられるか x^2検定を行った。その結果は有意であり（x^2（3）=12.22，p<.01），残差分析の結果，1（LINE 傍観高・対面傍観高）群では男子の度数比率が有意に高く（t=2.8，p<.01），2（LINE 傍観高・対面傍観低）群（t=2.2，p<.05），3（LINE 傍観低・対面傍観低）群（t=2.0，p<.05）では，女子の度数比率が有意に高かった。4（LINE 傍観低・対面傍観高）群のみ有意差は見られなかった（図2）。さらに，1（LINE 傍観高・対面傍観高）群には44.1%，3（LINE 傍観低・対面傍観低）群に36.4%が属しており，この2群に約8割のサンプルが含まれていた。

x^2検定と残差分析の結果から，多くの高校生の傍観行動は，対面かLINEかというコミュニケーション

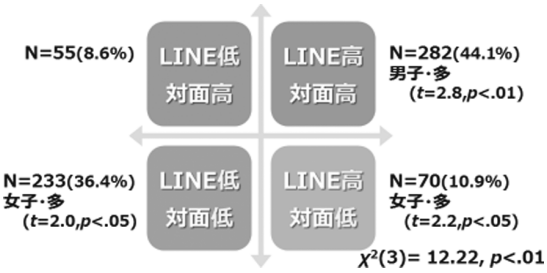

図2　傍観4群と性別との関連

の状況によらず比較的一貫していると考えられたため，コミュニケーション状況（対面・LINEコミュニケーション）×対象（仲がよい友人・さほど仲よくない友人）の4種類の傍観行動間の相関分析を行った。その結果，.46<r<.72と，中程度～強い相関が示された（表4）。

最も強い相関は，さほど仲よくない友人に関する対面での傍観行動とLINEコミュニケーションでの傍観行動との間にみられた。続いて相関が強かったのは，仲のよい友人に関する対面での傍観行動とLINEコミュニケーションでの傍観行動間であった。

傍観4群と心理的要因との関連

傍観行動の様相と心理的要因との関連を検討するために，心理的要因4得点を従属変数，傍観4群を独立変数とする1要因分散分析を行ったところ，すべての変数で有意な結果が得られた（被異質視不安$F(3,636)=12.13$，$p<.001$，向社会的スキル$F(3,633)=8.31$，$p<.001$，引っ込み思案行動$F(3,633)=4.51$，$p<.01$，攻撃行動$F(3,633)=3.21$，$p<.05$）。

それぞれ多重比較（Tukey法，$p<.05$）を実施したところ，一貫して，1（LINE傍観高・対面傍観高）群と3（LINE傍観低・対面傍観低）群との間に有意差が見られ，1（LINE傍観高・対面傍観高）群のほうが3（LINE傍観低・対面傍観低）群と比較して被異質視不安が高く，向社会的スキルが低く，引っ込み思案行動と攻撃行動が高かった。

なお，性差を考慮して上記分析を男女別に実施したところ，男女とも同じ結果であった（攻撃行動のみ有意差がなく，残り3変数で有意差あり）。よって，傍観4群と心理的要因との関連には性別の影響はないと考えられる（表5）。

傍観行動における心理的要因以外の規定因：コミュニケーションの対象・状況と傍観行動との関連

児童生徒の傍観行動の生起・抑止に影響を及ぼす要因には，個人要因のほかにどのようなものがあるだろうか。個人要因の影響の下，コミュニケーションの対象と状況が傍観行動にどう関連するかを検討するために，傍観行動4群別に，対象による傍観行動得点の差（対象が仲よい友人とさほど仲よくない友人との比較），ならびに状況による傍観行動得点の差（対面かLINEコミュニ

表4　対象×状況による4つの傍観行動得点間の相関分析結果

	LINE・仲のよい友人	LINE・さほど仲よくない友人	対面・仲のよい友人	対面・さほど仲よくない友人
LINE・仲のよい友人	—			
LINE・さほど仲よくない友人	.65**	—		
対面・仲のよい友人	.68**	.46**	—	
対面・さほど仲よくない友人	.50**	.72**	.59**	—

注）**：$p<.01$

表5　心理的要因を従属変数，傍観4群を独立変数とした1要因分散分析結果

	1（LINE高×対面高）	2（LINE高×対面低）	3（LINE低×対面低）	4（LINE低×対面高）	*F*	多重比較
	M(SD)					
被異質視不安	2.86(.82)	2.63(.78)	2.44(.79)	2.71(.73)	12.13**	1>3
向社会的スキル	3.10(.34)	3.15(.34)	3.26(.39)	3.18(.33)	8.31**	3>1
引っ込み思案行動	2.02(.59)	1.96(.50)	1.84(.59)	1.89(.54)	4.51**	1>3
攻撃行動	1.72(.44)	1.67(.44)	1.60(.48)	1.76(.50)	3.21*	1>3

注）**：$p<.01$，*：$p<.05$

表6　傍観4群別に実施した傍観行動のコミュニケーションの対象と状況による違い（対応のある *t* 検定結果）

	仲のよい友人－さほど仲よくない友人			LINEコミュニケーション―対面		
	M(SD)		*t*	*M(SD)*		*t*
1（LINE高×対面高）	2.74(.58)	3.41(.45)	16.12***	3.14(.47)	3.01(.41)	5.40***
2（LINE高×対面低）	2.15(.41)	2.76(.37)	7.85***	2.88(.41)	2.03(.32)	11.97***
3（LINE低×対面低）	1.45(.40)	1.99(.56)	13.89***	1.70(.44)	1.74(.42)	1.45
4（LINE低×対面高）	2.00(.40)	2.75(.36)	8.89***	1.96(.32)	2.79(.29)	14.88***

注）***：$p<.001$

ケーションかの比較）の検討を，対応のある *t* 検定を用いて実施した。その結果，傍観4群すべてにおいて対象による有意差が認められ，いずれも，さほど仲よくない友人のほうが仲よい友人よりも傍観行動得点が高かった。

一方，状況の検討では，3（LINE傍観低・対面傍観低）群では他3群と異なる結果が得られ，1（LINE傍観高・対面傍観高）群，2（LINE傍観高・対面傍観低）群，4（LINE傍観低・対面傍観高）群では，LINEコミュニケーションのほうが対面と比較して有意に傍観行動得点が高かったのに対して，3（LINE傍観低・対面傍観低）群では有意差が認められなかった（表6）。

考　察

研究2では，場面想定法を用いて，高校生がいじめと思しき場面に遭遇した際の傍観行動と心理的要因との関連を，現実場面と結びつけて検討した。

ここでも研究1と同様に，傍観行動と心理的要因との相関分析によって検討したが，弱相関しか見られなかった。いじめの加害・被害経験と同じく，傍観行動の生起も直接的に心理的要因と関連しているとは言えないことが明らかにされた。

そして，x^2検定と残差分析，相関分析の結果から，高校生の傍観行動は，対面かLINEかというコミュニケーションの状況によらず比較的一貫していることが示唆された。ここから，対面状況とLINEコミュニケーション状況とを連続的に捉えた傍観行動のパターンと心理的要因に関連があると推測された。分散分析を行ったところ，傍観行動が場面に依らず一貫して高いか低いかが心理的要因と関連していることが明らかになり，傍観行動をとりやすい者は，相対的に，人と違っていると見られることに不安を感じ，社会的スキルが総じて低い一方，傍観行動をとりにくい者は他者と

異なる行動をとることへの不安が低く，社会的スキルが高いことが示唆された。

さらに，心理的要因以外で，傍観行動を規定する要因として，コミュニケーションの対象との親しさ，加えて，コミュニケーションの状況を想定して分析を行った。対象の検討結果から，高校生の傍観行動が対象との親密さに依存しており，高校生は仲がいい友人とそうでない友人への態度が明確に異なることが示唆された。森田（2010）は，「いじめは人間の動物としての攻撃性に根ざすものではなく，人間が社会的に作り出す関係性に潜む病理である」と述べている。また土井（2014）は，現代の子どもたちは親しい友人に嫌われないための最大の気遣いを行い，それ以外の他者や規範・道徳よりも優先されることを示している。今回の分析結果は，これら先行研究の指摘に符合する結果と言えるだろう。

状況の分析結果からは，全般的には対面状況よりもLINEコミュニケーション状況のほうが，傍観行動が起こりやすい傾向が見出された。すなわち，概して高校生は対面のほうが傍観行動に抑止がかかる，あるいはLINEコミュニケーションのほうが傍観行動をとりやすいと考えられる。

しかし，対面・LINEにかかわらず傍観行動をとりにくい群は異なる特徴をもっていた。その特徴を，当群の心理的要因，すなわち社会的スキルの高さと被異質視不安の低さと関連して，コミュニケーション状況によらず傍観行動を抑止できるがゆえと解釈することは可能であろう。別の角度からみると，社会的スキルの高さや被異質視不安の低さといったポジティブな心理的要因をもつ高校生の傍観行動は，対象との親密さによって異なるものの，コミュニケーション状況には影響されにくいとも理解できる。

総合考察

本研究では，高校生のLINEいじめと心理的要因との関連を，現実場面との連続性を考慮しながら検討する2つの研究を行った。ここでは研究1と2の検討結果を，LINEいじめを軸に整理し，総合的な考察を行う。

研究1では，いじめの加害・被害経験をLINE，暴力，言葉の3種類で捉え，相互の関連，そして心理的要因との関連を検討した。LINEいじめと他のいじめ，またLINEいじめの加害–被害の関連は一定水準認められたものの，心理的要因との直接的な関連は見られなかった。一方，いじめ加害の様態は友人関係に関する心理的要因との関連が見られ，LINEを含む加害を行ったことがある高校生は，加害行為の経験がない者に比べて，同調性が高いことが示唆された。

研究2では，傍観行動と心理的要因との関連を検討した。傍観行動もいじめ加害・被害と同様に，心理的要因との直接的な関連は見られなかった。LINEコミュニケーションと現実を連続して捉えた時，コミュニケーションの状況にかかわらず傍観行動をとりやすい者ととりにくい者へと大別された。その中で，一貫して傍観行動をとりにくい高校生は他群の高校生とは異なる心理的な特徴がみられ，状況や周囲の影響を受けにくいこと，それと関連して，社会的スキルが高く，他者と違うことへの不安が低いことが示された。

2つの研究を総合すると，LINEコミュニケーションの特徴として，現実場面との連続性を想定したことは妥当だったと言えるだろう。LINEいじめと心理的要因の直接関連を検討しても意味ある結果は得られなかったにもかかわらず，現実場面のいじめやコミュニケーションとの連続性を考慮した検討を行った際に有意な結果が得られたことはその証左と言える。

研究2で取り上げた傍観行動の抑止は，現在，いじめ対策の基軸として期待されている。したがって，傍観行動の防御要因の特定を進め，教育や支援へ活用されることが望ましい。本研究では心理的要因以外にも，コミュニケーションの対象との親密さが傍観行動を強く規定することが見出された。本研究の結果を踏まえると，LINEいじめへの介入は，現実と連続した対人関係上の問題として，上述した要因を考慮した上で，指導・介入を行うが功を奏すると考えられる。軌を一にし

て，情報モラル教育においても，「情報」に特化しすぎて「現実」と乖離することのないよう，その連続性に配慮した指導が望まれる。

本研究の課題

本研究では，LINE いじめ等の加害と傍観行動を規定する要因の検討を行ったが，並列的に差の分析を行ったため，各要因の効果が示されておらず，その比較もできていない。そのため様々な要因のどれがいじめ加害や傍観行動に対して強い規定力を持つのか未解明のままである。それに加え，研究２における傍観４群は，３（LINE 傍観低・対面傍観低）群と１（LINE 傍観高・対面傍観高）群間の特徴が明らかになったに過ぎず，中間的な位置づけにある２群の意味は不明瞭なままである。また，研究１におけるいじめの加害・被害経験の測定は，研究協力者である生徒への倫理的配慮から，ある場合に丸をつけるという形で行った。そのため，丸をつけなかった者は経験がないのか，無回答なのか判別できず，データとしての厳密さは不十分である。

本研究では，現実場面との連続性を想定することで，LINE いじめに関する興味深い知見が得られたが，これは切り口のひとつに過ぎない。今後のいじめと心理的要因との関連を検討する研究には，たとえばいじめ場面の文脈を構成する要素を細やかに配置する等，さらなる well-designed の研究モデルと分析方法を適用する必要があるだろう。

付記　本研究にご協力いただきました学校関係者と高校生の皆さまに心よりお礼申し上げます。

本研究のうち研究１には重廣奈穂子氏（鹿児島純心女子大学大学院（当時））にご協力を賜りました。また，研究２は安心ネット協議会からの助成を受けて実施され（研究代表者：原田恵理子），本稿の一部は研究報告として2017年２月に発表された内容に加筆・修正を行ったものです。

文献

ボイド・D（2014）．It's complicated : The social lives of networked teen．　野中モモ（訳）　つながりっぱなしの日常を生きる―ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの―　草思社．

土井隆義（2014）．つながりを煽られる子どもたち―ネット依存といじめ問題を考える―．岩波ブックレット．

原田恵理子（2014）．学年全体を対象としたソーシャルスキルトレーニングの効果の検討，東京情報大学研究論集，**17**(2)，1 -11.

原田恵理子・渡辺弥生（2013）．高校生におけるネットいじめの実態．日本心理学会第77回大会発表論文集，1099.

原田恵理子・渡辺弥生（2015）．高校における総合的な学習の時間・特別活動をつなぐ包括的 SST　日本教育心理学会第56回大会発表論文集，270.

堀　裕嗣（2015）．スクールカーストの正体―キレイゴト抜きのいじめ対応―．小学館新書．

石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平（2009）．青年期女子の友人関係スタイルと心理的距離および学校適応との関連．発達心理学研究，**20**，125-133.

伊藤美奈子（2017）．いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究―自尊感情に着目して―．教育心理学研究，**65**，26-36.

伊藤美奈子・若本純子（2010）．学校現場で求められる自尊感情の再吟味と，測定尺度の作成．慶應義塾大学教職課程センター年報，**19**，71-90.

高坂康雅（2010）．青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向―青年期における変化と友人関係満足感との関連―．教育心理学研究，**58**，338-347.

MMD 研究所（2015）．2015年版：スマートフォン利用者実態調査．　https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1511.html

国立教育政策研究所（2011）．情報モラル教育実践ガイダンス．　https://www.nier.go.jp/kaihatsu/jouhoumoral/guidance.pdf

文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2015）．平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」．　www. mext. go. jp/b_menu/houdou/27/10/_icsFiles/ afieldfile/2015/11/06/1363297_01_1.pdf

森田洋司（1990）．家族における私事化現象と傍観者心理　現代のエスプリ，271，110-118．　至文堂

森田洋司（2010）．いじめとは何か　中公新書

西野泰代・若本純子・原田恵理子（2016）．児童生徒のコミュニケーション・トラブルの予防に向けて(1)―現実場面のいじめ経験とネットいじめを予測する要因―　日本教育心理学会第58回総会発表論文集，289.

大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和（2009）．児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響－学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して　教育心理学研究，**57**，324-335．

Polanin,J., Espelage,D.L., & Pigott,T.D.（2012）．A meta-analysis of school-based bullying prevention programs' effects on bystander intervention behavior and empathy attitude．School Psychology Review, 41, 47-65．

リスキーブランド（2017）．生活意識調査 MINDVOICE 調査生活者分析 SNS 利用者動向
http://www.riskybrand.com/topics/report_170510.pdf

嶋田洋徳（1998）小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究　風間書房

鈴木　翔（2012）．教室内（スクール）カースト．光文社新書.

詫摩武俊・戸田弘二（1988）．愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイルの尺度作成の試み―．東京都立大学人文学報，**196**，1-12．

田中辰雄・山口真一（2016）．ネット炎上の研究：誰があおり，どう対処するのか．勁草書房．

若本純子（2014a）．高校生の友人関係とメール，LINE の使用状況との関連．日本発達心理学会第25回大会発表論文集，595．

若本純子（2014b）．高校生の LINE 使用と，いじめ，友人関係，心理面との関連―仲がよい３人の友人とのコミュニケーションに着目して―．日本教育心理学会第56回総会発表論文集，634．

若本純子（2016）．児童生徒の LINE コミュニケーションをめぐるトラブルの実態と関連要因―小学生・中学生・高校生を対象とする質問紙調査から―．佐賀大学教育実践研究，**33**，1-16．

Ybarra, M., & Mitchell, K.（2004）．Online aggressor/targets, aggressors and targets: A comparison of associated youth characteristics. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **45**, 1308-1316．